

日本実験言語学会設立の趣意

1. 言語研究は、いまや多様化の一途をたどっている。そのひとつに、脳神経科学を援用して脳波実験を用いた実証的な言語研究の方法がある。しかし残念ながら、言語学の領域ではこのような実験方法を用いた言語研究を核とする学会が存在しない。
2. 脳研究は、医学や心理学で盛んに行われている。しかし、基本的に文系の学問である「実験音声学」が、医学における音声生理学や心理学における聴覚心理学、物理学における音響学などとは異なる目的と方法によって、今日では自立した独立科学として認められているという先例が示すように、脳波を使った言語研究も言語学や音声学における目的や方法が、医学や心理学などとは異なっている。
3. また、本学会においては音声学の研究に関して、伝統的な実験音声学的研究方法を尊重する。すなわち、ボトムアップによる帰納的方法による研究も、トップダウンによる演繹的研究方法と同程度に重視することを基本姿勢とする。そのような意味では、「自然科学」というよりはむしろ今西錦司などの主張するいわゆる「自然学」を意識しているということになる。DOE (design of experiments) を典型とする統計至上主義では、話者人口が極端に少ない少数民族の言語調査には対応できないという現実等を考慮してのことである。
4. 従って、理論言語学や実験科学とは異なる実証的な方法による研究を根底に据えた新学会の設立を、ここに提案する。こうすることによって、従来の枠組みからは見出せなかったような独創的な研究を掘り起こすことが期待されると信じるが故である。

2008 年吉日

城生 佰太郎
三浦 弘
池田 潤